

従属節に「仮定条件」をさしだす 従属複文の主節末のスル

—シナイト節の従属複文を中心に

宮部真由美

◆要旨

従属節に「仮定条件」をさしだす従属複文には主節末の述語がスルダロウの形だけでなく、スルの形も用いられている。そして、この従属複文にはまだ起こっていないことがら（＝未来のことがら）が表わされている。この論文では、従属節に「仮定条件」をさしだしているシナイト節の従属複文が、否定的なことがらをさしだすということに偏って用いられ、発話における意味をもつことと、主節末の述語がスルの形であることとの関係を考えるため、未来を表わすスルの形について分析し、未来を表わすスルに「スル（予定）」、「スル（意志）」、「スル（予測）」の場合があることを認めた上で、さらに「スル（予測）」である場合の分析を進めた。その結果、「未確認の断定」のスルを考えることがシナイト節の従属複文の特徴を考える上で有効であることを述べた。

◆キーワード

シナイト節、仮定条件、発話における意味、未来のスル、断定と推量

◆ABSTRACT

In conditional sentences, the forms *surudaroo* and *suru* are used as predicates at the end of the main clause. And the events that has not yet happened are expressed in these conditional sentences. In this study, we analyzed the *suru*-form representing the future with the understanding that the predicate at the end of the main clause is the *suru*-form that is connected with *shinaito*-clauses carrying the meaning of the utterance. We then examined "*suru* (certainty)," "*suru* (volition)," and "*suru* (prediction)" in the *suru*-form representing the future. In addition, we analyzed "*suru* (prediction)." We concluded that "*suru* of unconfirmed assertion" is valid in considering the characteristics of conditional sentences with *shinaito*-clauses.

◆KEY WORDS

shinaito-clause, conditionals, utterance meaning, *suru*-form representing future, assertions and inferences

“*Suru*” in the Main Clause that is
Accompanied by a Conditional
Subordinate Clause
Analysis of conditional sentences
with *shinaito*-clauses
MIYABE MAYUMI

1 はじめに

この論文では、従属節に「仮定条件」をさしだすト条件節のうち、シナイト節^[註1]の従属複文について分析していく^[註2]。

ト条件節の従属複文はすでにあることがらを表わすことが多いが、まだ起こっていないことがらを表わす場合にも用いられる。(1)、(2)がまだ起こっていないことがらを表わす場合のシナイト節の従属複文の用例である^[註3]。

- (1) 「槍の穂に登るのは無理だ。だが、ビバークの地点を変えないと、このままでは凍え死んでしまう」 (孤高の人)
- (2) 兵頭氏は胡弓で私の胸をぐいと押した。／「どうしたんだ。はやくしないと焚火が消えるぞ。」／「許してください。」 (忍ぶ川)

まだ起こっていないことがらを表わす場合のト条件節の従属複文について宮部 (2014) は、従属節の述語が肯定形 (スル) よりも否定形 (シナイト) の用例の方が多くみられることを述べ、シナイト節の従属複文に表わされることがらが否定的な内容に偏っていること、この複文が発話における意味をもつことなどについて分析を行なっている。具体的に述べると、(1)、(2)のシナイト節の従属複文には従属節にも主節にも「望ましくないことがら」がさしだされている。そして、(1)であればビバークの位置をかえること、(2)であればはやくすることを促すという「注意喚起」や「実現・実行してほしいことがらを述べること」のような発話における意味を表わしている。さらに宮部 (2014) では、シナイト節の従属複文の主節末の述語には「スルダロウ」や「スルカモシレナイ」などよりも、スルの形が多く用いられていることについても述べられている。

従属節に「仮定条件」を表わすのであれば、主節末にはスルダロウなどの形が現れることが予想されるが、シナイト節の従属複文はそうではない。このことに関して宮部 (2014) には、シナイト節の従属複文は主節末の述語がスルの形であることが、上で述べたような発話における意味を表わすことに関係があるという記述がある。しかし、具体的に論じられてはいない。本稿は、シナイト

節の従属複文の主節末の述語がスルの形であること理由について考えていく。

2 問題のありか

2.1 先行研究のスル

ここでは、先行研究においてスルの形とスルダロウの形がどのようにとらえられているかを確認しておく。先行研究のスルとスルダロウは、一般的に表1のようにとらえられている^[註4]。奥田 (1984) は、いいきりの文 (述語動詞がスルの形) とおしはかりの文 (述語動詞がスルダロウの形) とは「現実世界の出来事の確認のし方の違いを表現している」(p.56) という。そして、モーダルな意味において、奥田 (1984) や仁田 (1997, 2000) などはスルとスルダロウを「断定」と「推量」という関係でとらえる^[註5]。

表1 先行研究におけるスル・スルダロウの関係

述語の形	スル	スルダロウ
現実世界との関係・確認のしかた	観察 ^[註6] により ことがらを確認	想像や思考によって ことがらを確認
モーダルな意味	断定	推量

表1で示した分類は、過去の場合も非過去 (未来、現在) の場合も含んだものをスルで代表させており、テンス的な意味が反映されたものではない。例えば、未来のことがらを含むまだ起こっていないことがらは、観察によってことがらを確認することはできず、表1の規定に矛盾する。

2.2 発話における意味と主節末のスルの形

(1)、(2)のシナイト節の従属複文には発話における意味が現れることを述べたが、(3)ではそうした意味がはっきりとしない。これは主節末がスルの形であっても、(3)と(1)、(2)とではスルの形が表わす意味が異なるためではないかと考える。例えば、(3)では副詞「きっと」の存在からもわかるように、

このスルはスルダロウで言いかえることができる。

(3) 「いいえ。わたしよりはあぶない目に逢うお前にお守を預けます。晩にお前が帰らないと、きっと討手が掛かります。お前が幾ら急いでも、あたり前に逃げて行っは、追いつかれるに極まっています。……」

(山椒大夫)

では、上で述べるようなスルの形が表わす意味の違いとは何だろうか。本稿は(1)、(2)のような発話における意味を表わすシナイト節の従属複文の主節末のスルは「未確認^[註7]の断定」のスルであると考え。このスルはテンス的な意味が未来であるため、観察によってことがらを確認したものではない。しかし、「断定」のスルと同等の意味で用いられているもので、観察によってことがらを確認したものではないことがらであっても、話し手が「断定」として述べることに特徴があるものであると考える^[註8]。以下の節ではこのように考える理由について述べていく。

3 未来を表わす場合のスル

2.1で言及した観察によってことがらを確認していない場合のスルに言及するものに、奥田(1984,1985)や仁田(1997,2000)や宮崎(2002)などがある。仁田(1997:102)は、スルとスルダロウのモーダルな意味について、図1のように図示している。スルは、図1の上部の「断定」で、さらに「確認」と「確信」とに下位分類されている。

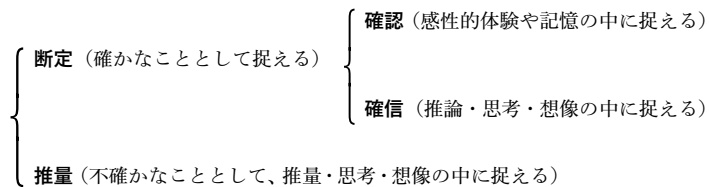


図1 仁田(1997)のスルとスルダロウ

仁田(1997,2000)は観察によってことがらを確認していない場合のスルに相当するものを「確信」とよび、「確信」とは「推論や思考・想像の作用を通して、事態の成立・存在を疑いのない確かなものとして捉えること」(仁田1997:100)であると述べる^[註9]。ただし、宮崎(2002)が仁田(2000)の「確信」に対して、「確信」は〈確信的な判断〉にほぼ対応すると思われるが、〈主観的な評価〉に当たる類型を立てていない点や、「確信」と「推量」とが対立関係にある(想像・推論の中に確かなものとして捉えるか不確かさを有するものとして捉えるか)とする点などが本書と異なる(p.132)^[註10]と述べているように、本稿も特に「確信」と「推量」とが対立関係にあるという点は仁田(2000)と意見を異にする。

宮崎(2002:126-133)は、スルの認識的な意味のタイプとして、表2の〈事実の確認〉、〈確信的な判断〉^[註11]、〈主観的な評価〉の3つをとりだしている。〈確信的な判断〉が観察によってことがらを確認していない場合のスルに相当するものである。

表2 宮崎(2002)のスル(※スル以外に名詞述語と形容詞述語も含む)

	〈事実の確認〉	〈確信的な判断〉	〈主観的な評価〉
確信度の分化	×	○(確信度が低下)	×
思考内容化	×	○(確信度が低下)	○
実現条件	とくになし	名詞述語文、未来の出来事を表す文、反事実的条件文、ノダ文	述語が主観的な評価を表す単語

従属節に「仮定条件」をさしだす従属複文もテンス的な意味は発話時以降=未来である。宮崎(2002)の〈確信的な判断〉となる文には「未来の出来事を表す文」が挙っており、宮崎(2002)は〈確信的な判断〉となる文について、「命題内容を事実そのものと認識しているわけではないが、命題内容と事実の一致が確実であると判断しており、確かさの点では、〈事実の確認〉とほぼ同等である」(p.128)と述べている。しかし一方で、〈事実の確認〉が「推量」と対立関係にあり、「〈確信的な判断〉を表す無標形式(引用者注:スルの形)の文は、判断を表すという性質から、「だろう」の文への近づきを見せ、典型的な認識のムード対立が成立していない」(p.132)と述べており、先の記述との関係にお

いて〈確信的な判断〉の位置づけが明確ではない。

本稿も観察によってことがらを確認していない場合(テンス的な意味が未来の場合)のスルは、2.1の表1のスルにそのまま当てはまらないと考える。未来のことがらは観察によってことがらを確認することはできないからである。次項以降では、従属節に「仮定条件」をさしだす従属複文において、主節末の述語のスルの形がどのようなものとして用いられているかを考えるために、未来のことがらを表わす場合に用いられるスルの形についてみていくことから分析を進めていく。

3.1 未来のことがらとスル

鈴木(1979:121)は、「未来の特定の時間に確実に起こることが予定されていることをはっきりと認識してつたえるばあいのほかは、未来における実現を話し手がなんらかのしかたで予測してのべるわけである。また、それが話し手自身の意志的な動きや変化であるばあい、未来における実現を意志としてのべるのである」と述べている。この記述によると、未来に関するスルの形には次の3つの場合がある。

- ① 未来の特定の時間に確実に起こることが予定されていることをはっきりと認識して伝える
- ② 未来における実現を話し手がなんらかのしかたで予測して述べる
- ③ 未来における実現を意志として述べる

便宜的に、この①、②、③を「スル(予定)」、「スル(予測)」、「スル(意志)」とよぶことにする。「スル(予定)」は、(4)のように発話時以降に「確実に起こることが予定されていることをはっきりと認識してつたえる」(鈴木1979:121)ものである。(4)は時刻について述べており、話し手はそのことがらを確実に起こることがらとしてとらえ述べている。「スル(意志)」は、(5)のように「実現を意志としてのべる」(鈴木1979:121)ものである。(5)はこのあと話し手が「行く」という行為を実行する意志があることを述べている。

(4) 「あと5分で、3時になる」 (作例)

(5) 「すぐに行きますから」 (花の降る午後)

そして、「スル(予測)」は、(6)のように発話時以降のことがらについて「予測して」(鈴木1979:121)述べるものである。

(6) 「きょうは夕立がくるから、涼しくなるよ」 (作例)

以上のように、テンス的な意味が未来の場合のスルには複数の意味がある。次では「スル(予定)」、「スル(意志)」、「スル(予測)」が従属節に「仮定条件」をさしだす従属複文とどのように関係しているか確認していくことにする。

3.2 「スル(予定)」と従属節に「仮定条件」をさしだす従属複文

主節の述語が「スル(予定)」である条件節を従属節とする従属複文の用例は、(7)のようなタラ条件節の用例があげられる。(7)は「従属節に発話時以降に起こることが確実に起こることがら条件として述べられ、その帰結である主節のことがらには確実に起こること(予定されていること)をはっきり認識して述べるもの」(宮部2013:21)である。このようなことがらを表わす複文はタラ条件節の従属複文で、ト条件節やバ条件節によるものはみられない。

(7) 「あの大きな時計の大きな針がね、丁度あすこのところへ行ったら、汽車ぼっぼがビイって出ますよ」 (波195 ※鈴木1979:120から引用)

3.3 「スル(意志)」と従属節に「仮定条件」をさしだす従属複文

主節の述語が「スル(意志)」である条件節を従属節とする従属複文の用例には、(8)、(9)のように、タラ条件節の場合とバ条件節の場合のものがある。

(8) 「そう／私は首をかしげた。いつものつぐみの行動はさっぱりわからないが、今回は心あたりがあった。／「チャンスがあったら聞いとくわ」 (TUGUMI)

(9) 「世の中のためにですわ。もし連載を中止なさらなければ、あの新聞の購読を中止します」
(冬の旅)

ト条件節の場合の用例には(10)、(11)のようなものがある。しかし、採集された用例は少なく^[註12]、同じパターンのもので(脅すような場面での発話となっているもの)しかなかった。

(10) 動くと撃つぞ。(前田 2009: 65から引用)
(11) 静かにしないと、ぶっ殺すぞ。(作例)

3.4 「スル(予測)」と従属節に「仮定条件」をさしだす従属複文

1節で宮部(2014)がシナイト節の従属複文の主節の述語はスルが多いことを述べていることを述べたが、このスルは、(10)、(11)のような用例をのぞくと「スル(予測)」である。また、仁田(1997,2000)の「確信」や宮崎(2002)の〈確信的な判断〉がさすも「スル(予測)」であるといえる。この「スル(予測)」は観察によってことがらを確認していないため、表1にあるスルダロウの「想像や思考によってことがらを確認」することとの関係が問題となる。つまり、シナイト節の従属複文の「スル(予測)」が、スルダロウが表わす「推量」と同じ位置づけとなるのかという点を考えなくてはならないだろう。4節以降では「スル(予測)」について分析を進め、シナイト節の従属複文の主節の述語のスルをどのようにとらえればいいのか考えていくことにする。

4 シナイト節の従属複文と「スル(予測)」

タラ条件節・バ条件節の従属複文の主節末の述語にもスルの形はみられる。では、シナイト節のスルと、タラ条件節・バ条件節のスルとは同じものだろうか。もし異なるものであるなら、どのような違いがあるのだろうか。4節では、「スル(予測)」についての分析を進めるために、それぞれの従属節に「仮定条件」をさしだすシナイト節、タラ条件節・バ条件節の従属複文の主節末のスルがそ

れぞれどのようなものであるかについて考える。

4.1 「スル(予測)」における「確かさ」と「可能性」

言語形式の違いにより、表わす意味が異なるということは、例えばそれは、「推量」であるか「断定」であるかをスルダロウとスルによって、形式的に二分できるということであるだろう。しかし、一方の言語活動を行なう人間の実際の思考・認知活動では、確かに、こうした活動によってとらえられることからの両極端に、話し手が確信的にとらえたものや話し手がそのことからの成立の可能性が高いものとしてさしだすものと、そのことからの成立の可能性が低いものとしてさしだすものがあるとしても、これらは連続的に存在するものであり、その段階に明確な境界をひくことはできない。つまり、事実であることがらを述べる際に用いられる「断定」のスルはさておき、まだ観察によって確認していないことがらを述べる際に、人間の実際の思考・認知活動をスルとスルダロウの形のみで正確に言語化するのには難しい。もし、より正確に言語化したいのであれば、一つの手段として、「きっと」、「かならず」、「たぶん」、「おそらく」などの副詞^[註13]を使用することがあげられるだろう。副詞を用いることにより、「スル(予測)」が表わす意味や、また「推量」の段階的な様子(程度)を明示的に表わすことができる^[註14]。例えば、「かならず」は確かさがかなり高いことを表わす副詞であるといえ、述語がスルの形((12))で用いられる場合が多い^[註15]。

(12) 「あそこ、地下鉄の駅から、一分ですものね。今に必ず値上りするわよ。それに、内装だって、愛想が悪くて堅実でいいわ。……」
(太郎物語)

そのほかの「きっと」((13)、(14))、「たぶん」((15)、(16))、「おそらく」((17)、(18))は述語がスルの形の場合もスルダロウの形の場合にも用いられていた。それぞれの最初の用例((13)、(15)、(17))が主節の述語がスルの形、あとの用例((14)、(16)、(18))がスルダロウの形の用例である。

- (13) 「隆士にいさん。ふじさんはきっとなおります。必ず丈夫になります」 (塩狩峠)
- (14) 「おみつちゃんの気性は知ってるじゃないか、きっとまた檜物町で喧嘩でもして来て、八つ当りをしたんだろう、気にするなよ」 (さぶ)
- (15) 「今日は来られないわよ、多分。地の人の宴会だから。」 (雪国)
- (16) 「そうね。たぶん、訊かれるでしょうね」 (冬の旅)
- (17) 「……それで実は君に話があるのだ。加藤君第三課へ来ないか。来てくれたら、ぼくも助かるし、君もよくなる。おそらく君は技師になれる」 (孤高の人)
- (18) 「おれは冬にならないうちに、おそらく会社をやめるだろう」 (孤高の人)

副詞「きっと」は、工藤 (2000) の副詞の分類で「確信」(p.189) を表わすものとして分類されているが、このような副詞と一緒に述語にスルの形が用いられたとしたら、このスルのモーダルな意味は「断定」ということから離れていってしまうだろう。なぜならば、「断定」とは、話し手が実際に観察することによって確認したことがらであるため、そもそも確かさを述べる必要はない。一方で、「推量」(工藤 2000: 189) と分類される「たぶん」、「おそらく」と一緒にスルが用いられた場合、そのスルは、もはや「断定」であるとはいえないだろう。つまり、「スル (予測)」は話し手が確認したことではない (未確認である) ということから、「推量」という面を潜在的にもつものであるといえる。

4.2 条件節の従属複文と「確かさ」・「可能性」

(19)～(21) のタラ条件節の従属複文では、いずれの用例にも副詞「きっと」が現れているが、(19)、(20) の主節の述語はスル、(21) はスルダロウである。

- (19) 「ユノーに車を借りるわ。ガソリンを一杯にして返すって言ったら、きっと貸してくれるから」 (海辺の扉・上)
- (20) 「男の人よ。鮎ちゃんも会ったら好きになるわ、きっと」 (あすなる物語)
- (21) 「では、寺西にまかせるか。俺は、少年院出だということを引け目に思っていないみんなを見て、すっかり安心したよ。院長はこんな場を見

たら、きっと喜んでくれるだろう。十月頃に、もういちど、ここで、同窓会をひらく。これでいいかい」 (冬の旅)

(19)、(20) では主節の述語がスルであるが、「きっと」が一緒に用いられ、主節には話し手が予測・推測することがら、つまり、おしはかり (推量) によることがらが表わされている。そのため、(19)、(20) のスルをスルダロウにかえても意味の違いはないだろう。また、タラ条件節、バ条件節の従属節には、次の (22)、(23) のように「もし」や「万一」などの副詞^[註16] が現れる。

- (22) 「夢を持ちゃいけないよ。夫婦生活ってものはとても面倒臭いものだ。あたしゃ我慢ができなかったね。万一生れ替って、もう一度しろって、いわれたら、やっぱり断るだろうね」 (花影)
- (23) 「私のことは気にしなくていい。ただの風さ。もし君がそう呼びたければ、火星人と呼んでもいい。悪い響きじゃないよ。……」 (風の歌を聴け)

このような副詞が現れるということは、タラ条件節、バ条件節には副詞という語彙的・文法的な手段も用いることができ、従属節には「起こるかどうかわからないことがら」がさしだされているといえる。

では、シナイト節の場合はどうであろうか。2.2 でとりあげた (3) = (24) の用例を再考する。(24) はシナイト節の従属複文の主節の述語がスルで、「きっと」が一緒に用いられている用例である。

- (24) 「……晩にお前が帰らないと、きっと討手が掛かります。お前が幾ら急いでも、あたり前に逃げて行ったら、追い附かれるに極まっています。……」 (山椒大夫)

(24) のスルも、この 4.2 でみてきた従属複文の場合と同様、「きっと」があることで構文的に話し手の想像や思考によることがらであることが明示的に表わされる。このため、スルダロウにかえても意味の違いはない。そのことによ

り、(24)の従属複文は宮部(2014)が述べるような「注意喚起」や「実現・実行してほしいことがらを述べること」のような発話における意味を表わさないだろう。さらに(25)、(26)のように、主節末がスルダロウのシナイト節の従属複文の用例もみられ、これらも発話における意味を表わさない。(24)～(26)の複文は構文的に話し手の想像や思考によることがらであることが明示的に表わされており、このためタラ条件節やバ条件節に言いかえてもおかしくないだろう。

- (25)「荒れていますね。」／「手入れ出来るうちにしておかないと、立ぐさ
れてしまうだろう。」(山の音)
- (26)「戦争が始まるんですか」／「始まらないと、どうにもこうにもやり切
れないだろう。この沈滞した空気を吹きとばすものは戦争以外にな
もないんだ」(孤高の人)

4.3 「スル(予測)」と「未確認の断定」のスル

4.1、4.2の分析から、テンス的な意味が未来であることにより、「スル(予測)」には二つの場合があることがわかる。スルダロウで表わされる「推量」と同等の意味で用いられる場合と、観察によって確認してしないことがらであるにもかかわらず、「断定」のスルと同等の意味で用いられる場合とである。本稿では、2.2で前もって述べたが、後者の「断定」のスルと同等の意味で用いられる場合のスルを「未確認の断定」とする^[注17]。3節でとりあげた宮崎(2002)の〈確信的な判断〉とは、宮崎(2002)の記述をみる限り、本稿で分析した「スル(予測)」の前者をとらえたものであるだろう。宮崎(2002)は〈確信的な判断〉の文の特徴として「確信度が低下」することをあげていたが、当然、未来のことがらであるので、確信度は低下せざるをえない。だが、未来のことがらであっても、話し手が「断定」として述べることに「未確認の断定」のスルの特徴があると本稿は考える^[注18]。

4.4 発話における意味と「未確認の断定」

シナイト節の従属複文が、副詞や主節末のスルダロウにより、タラ条件節やバ条件節の従属複文のように用いられる場合があることを4.2に述べた。この場合に発話における意味をもたないということは逆に、1節にあげた(1)、(2)のような発話における意味を表わす場合は主節の述語がスルであり且つ、このスルは「推量」にはずれていない「未確認の断定」であるということだろう。つまり、シナイト節の従属複文には、従属節のことがらにも主節のことがらにも「望ましくないことがら」が表わされていたが(宮部2014)、このような「望ましくないことがら」をスルの形を用いて、「未確認の断定」として述べるとい条件のもとで、「注意喚起」や「実現・実行してほしいことがらを述べること」のような発話における意味を生じさせるといえる。

一方、タラ条件節、バ条件節の従属複文は、4.2で述べたように従属節に「起こるかどうかわからないことがら」をさしだすということが基本となる特徴である。そのため、否定的なことがらであったり、主節末の述語がスルの形となることがあっても、基本的には「起こるかどうかわからないことがら」をさしだすということが第一義であり、これらの従属複文とシナイト節の従属複文とは異なる位置づけにあるものとして考えるべきだろう。

5 おわりに

本稿では、未来を表わすスルに、「スル(予定)」、「スル(意志)」、「スル(予測)」の場合があることを認め、従属節に「仮定条件」をさしだす従属複文にはこれらのスルの形が主節末の述語に用いられていることを確認した。さらに「スル(予測)」である場合の分析を進め、その結果、「未確認の断定」のスルを考えるとシナイト節の従属複文の特徴を考える上で有効であることを述べた。

本稿で分析した「スル(予測)」は、確かさ(確信度)や可能性を表わす副詞との併用や文脈などにより、「推量」へ移行する。これは、述語の形はスルであっても、観察によってことがらを確認していないという理由から、潜在的に「推量」という面をもつためである。だが、そうしたスルにおいて「未確認の

断定」のスルを考えることは、特に、複数の異なる形の従属節が「仮定条件」をさしだす日本語の条件節の従属複文を考える上で有効なものであるといえる。
〈一橋大学〉

付記

本稿は2014年11月23日に大阪大学で行われた日本語文法学会第15回大会において口頭発表した内容に加筆・修正を加えたものである。

注

- [注1] …… 条件節は肯定形か否定形であるかを区別しない場合はト条件節のように記述し、肯否を区別する場合はスルト節やシナイト節のように記述する。
- [注2] …… 分析対象とするのは従属節の述語が否定形（シナイト）の場合であるが、肯定形（スルト）の場合も、後述するシナイト節の従属複文と同様の意味を表わす場合もある。しかし、肯定形も含めたト条件節の従属複文をどのように考えるかは別稿にて論じることとしたい。
また、分析に用いた用例は近代から現代までの小説（約50冊）から採集した。さらに『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（国立国語研究所）からも適宜用例を補いながら分析を進めた。
- [注3] …… 本稿で分析対象とするものは、複文に表わされることがが具体的な時間軸に位置づくもの（時間的な限定をうける場合）である。
- [注4] …… 表1はスルースルダロウで代表させているが、先行研究は動詞述語だけでなく、名詞述語や形容詞述語の場合も含む研究である。
- [注5] …… 宮崎（2002）は「確認」と「推量」という用語を用いている。
- [注6] …… 奥田（1984:58）では「直接的な認識」と述べられている。
- [注7] …… 「未確認」とは発話段階で確認していないという意味で用いている。そのあと確認することは含意しない。
- [注8] …… 林（2013:72）にも「仮定条件」節の帰結（主節）に「推量的に述べる」場合と「断定的に述べる」場合とをたて分類するものがある。
- [注9] …… 仁田（1997）の「断定」（「断定」は「確認」と「確信」の二種があると述べる）に関する分析では、「確信」ではない用例についても分析が行なわれており、そのなかには、あとの節で述べる本稿の「スル（予定）」に相当する用例（p.111）や「スル（意志）」に相当する用例（p.105）も記述されている。本稿ではこの二つがどこに位置づくものであるかは述べていない。別稿にて論じたい。

- [注10] …… スルに関する宮崎（2002）の分類は本稿の表2に提示する。
- [注11] …… 三宅（1995）にも認識的モダリティのなかに「確信的判断」という分類がある。三宅（1995）では「確信的判断」の形式として、ニチガイナイとハズダがあがっている。
- [注12] …… 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（国立国語研究所）の用例も確認したが、主節末の述語が「スル（意志）」であるト条件節の従属複文の用例は6例のみであった。
- [注13] …… 工藤（2000:188-191）では、これらの副詞は叙法副詞とよばれ、「きっと」、「かならず」は「認識的な叙法」の「基本叙法－確信」として分類されている。「たぶん」、「おそらく」は「認識的な叙法」の「基本叙法－推測」として分類されている。
- [注14] …… 条件節の従属複文の主節には、「可能性」や「必然性」といったモーダルな意味を表わす「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」、「ハズダ」のモダリティ形式もよく現れる。この節では、副詞と主節のスルとスルダロウとの関係を見ていくが、「ダロウ」以外の認識的なモダリティ形式は、ここであげたような「話し手の内的思考による認識」（宮崎2002:143）として表わすものが、従属節に「仮定条件」をさしだす従属複文に用いられる。そして、副詞と同様、これらのモダリティ形式は人間の実際の思考・認知活動（話し手が現実世界をどのようにとらえているか）をより正確に言語化することに関わっていると考える。
- [注15] …… 「必ず、彼は戻って来るでしょう」のように、述語がスルダロウの形と一緒に用いられないわけではない。
- [注16] …… 「もし」や「万一」といった副詞は、工藤（2000:188-191）において、叙法副詞とよばれ、「条件的な叙法」の「仮定条件」として分類されている。
- [注17] …… 「未確認の断定」のスルを「スル（予測）」のなかに位置づけるか、ここから独立したものとしてとらえるかについては現時点では保留とする。
- [注18] …… 奥田（1985:51）は「想像の範囲からはみだすことのない出来事が、いいきりの文でえがきだされているとすれば、そのいいきりの文ははなし手のきつい主観的な確信の表現になる」と述べているが、この記述は観察によってことがらを確認していない場合のスルの文について、「未確認の断定」のスルをとらえるということと相違しないものだろう。

参考文献

- 奥田靖雄（1984）「おしはかり（一）」『日本語学』3(12), pp.54-69. 明治書院
- 奥田靖雄（1985）「おしはかり（二）」『日本語学』4(2), pp.48-62. 明治書院
- 工藤浩（2000）「副詞と文の陳述的なタイプ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『モダリティ』pp.161-234. 岩波書店
- 鈴木重幸（1979）「現代日本語の動詞のテンスー終止的な述語につかわれた完成相の叙法断定のばあい」（鈴木重幸（1996）『形態論・序説』pp.107-158. むぎ書房に所収）
- 仁田義雄（1997）「断定をめぐって」『阪大日本語研究』9, pp.95-119. 大阪大学

- 仁田義雄 (2000) 「認識のモダリティとその周辺」 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩 (2000) 『モダリティ』 pp.79-159. 岩波書店
- 林四郎 (2013) 『基本文型の研究』 ひつじ書房
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究』 くろしお出版
- 三宅知宏 (1995) 「「推量」について」 『国語学』 183, pp.76-86. 国語学会
- 宮崎和人 (2002) 「認識のモダリティ」 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 『モダリティ』 pp.121-171. くろしお出版
- 宮部真由美 (2013) 「タラ条件形を従属節とする従属複文の主節と従属節の意味類型と複文」 『文学部紀要』 26(2), pp.1-28. 文教大学
- 宮部真由美 (2014) 「望ましくないものをさしだすシナイト節の従属複文—従属節が「仮定条件」を表わす従属複文の分析」 『日本語文法』 14(1), pp.3-19. 日本語文法学会

用例採集資料 (※この論文で引用した用例の作品のみをあげる)

『あすなろ物語』 井上靖、『花影』 大岡昇平、『孤高の人』 新田次郎、『さぶ』 山本周五郎、『山椒大夫』 森鷗外、『塩狩峠』 三浦綾子、『忍ぶ川』 三浦哲郎、『太郎物語』 曾野綾子、『冬の旅』 芹沢光治良、『山の音』 『雪国』 川端康成 以上すべて新潮文庫、『海辺の扉・上』 『花の降る午後』 宮本輝 角川文庫、『TUGUMI』 吉本ばなな 中公文庫、『風の歌を聴け』 村上春樹 講談社文庫
